

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32614

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12931

研究課題名（和文）レヴィナスの性差・家族の現象学

研究課題名（英文）Emmanuel Levinas' Phenomenology of Gender and Family

研究代表者

小手川 正二郎（Kotegawa, Shojiro）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：30728142

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：初年度から継続してレヴィナスのテキストや草稿を読み直し、1940～1960年代のフランス現象学の様々なテキストとの関連のもと捉え直すことで、レヴィナス哲学における性差と家族の現象学的分析を、現象学的伝統および同時代の文脈の中で相互関連したものとして理解し直すことができた。またそこで取り出されたレヴィナスの性差論・家族論の現代的意義を、前者については現代のジェンダー論やフェミニスト哲学との比較のもと、後者については現代の家族倫理学や反出生主義の議論との比較のもとで再評価するという目的を達成することができた。

以上の成果を国内の学会や書籍で発表しただけでなく、海外でも発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はレヴィナスの性差論を緻密に理解し直し、それが社会構築主義的なジェンダー概念に依拠する現代のジェンダー論と比べて、人々の身体化された習慣や感情に光をあて、そこから人々のジェンダー化された経験や感覚、対人関係や性愛を再検討することを可能にするものであることを明らかにした。またレヴィナスのいう親子関係が生物学的な親子関係に縮減しえない家族概念を提示していることを示すことで、レヴィナスの家族論が反出生主義の枠組みを乗り越えつつ、現代の家族論にも寄与しうるものであることを明らかにした。これらの点で本研究は学術的な意義だけでなく、現実社会の性差・家族の見方にも多大な寄与をなすものとなった。

研究成果の概要（英文）：By continuously rereading Levinas's texts and drafts and reappraising them in relation to various French phenomenological texts of the 1940s-1960s, this study reappraises the phenomenological analysis of gender difference and family in Levinas's philosophy as interconnected within the phenomenological tradition.

This study achieved the second objective of reevaluating the philosophical significance of Levinas's theories of gender difference and family, the former in comparison with contemporary gender theory and feminist philosophy, and the latter in comparison with contemporary family ethics and anti-natalism debates.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 倫理学 現象学 レヴィナス ジェンダー 家族 フェミニスト現象学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、レヴィナス哲学の内在的読解とその性差論と家族論の応用という二つの軸からなるものであるが、その背景としては、レヴィナスの草稿や講義録の公開・出版という文献学的な背景と、とりわけ英語圏におけるその実践的な読解・活用という背景があった。そのため、開始当初は、草稿の閲覧・研究を行うためのフランスへの渡航や、ジェンダーや家族に関わる国際差学会への参加や在外研究も予定していたが、covid-19 の世界的な流行によって在外研究の予定の変更を余儀なくされた。

2. 研究の目的

本研究は、二つの目的からなる。第一に、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの哲学的議論を現象学的伝統および同時代の文脈の中で正確に理解し直し、従来は切り離して論じられがちだった性差論と家族論の結びつきを詳らかにすること。第二に、そうして取り出されたレヴィナスの性差論をフェミニスト現象学の文脈において再評価し、男性的・女性的身体性の現象学的分析につなげることで、家族論の方は現代の家族論、とりわけ英米圏において議論されている家族倫理学と比較検討し、家族関係の現象学的分析を試みるというものである。

3. 研究の方法

本研究は第一の目的については、レヴィナスの初期から中期に至るテキストや草稿の読解・分析および、レヴィナスの同時代の現象学研究者(サルトル、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワール)との比較研究を通じて行った。第二の目的については、レヴィナスの性差論を現代的な文脈で再評価するために、現代のジェンダー論やフェミニスト哲学(とりわけフェミニスト現象学)におけるジェンダーや性的身体性の分析との比較を通じて行った。家族論については、現代の家族倫理学および反出生主義をめぐる諸議論との比較を通じて行った。

4. 研究成果

レヴィナスの性差論と家族論を彼に内在する観点から包括的かつ正確に理解し直すという本研究の第一の目的については、初年次から一貫して、初期から中期に至るテキストや草稿の読解・分析を行い、並行してレヴィナスの性差論・家族論に関する二次文献を収集・読解した。この成果の一部は、4年目に東京都立大学哲学学会シンポジウム「今なぜ現象学なのか」において「現象学とイデアリズム ―レヴィナスの現象学的倫理―」というテーマで発表した。

また、レヴィナスの性差論および家族論(親子論)を、現代哲学の文脈に置き直すことでその倫理的意義を客観的に評価し、応用可能性を具体的な形で示すという第二の目的については、初年次からジェンダー論やフェミニスト哲学との比較検討および英語圏で議論が進められている「反出生主義」との関連について研究を進めた。前者については、2年目に哲学若手研究者フォーラムの「フェミニズムの哲学」を主題とした招待講演で発表し、3年目に「フェミニスト現象学」を主題とした日本現象学会シンポジウムで発表した。

また性差については、レヴィナスと同時代の現象学者、サルトル、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワールにおける身体や性をめぐる現象学的分析との関連について考察し、とりわけレヴィナスの性差の現象学との相互的な関連を有するボーヴォワール『第二の性』(1949年)については、より詳細な検討を試みた。生物学的性別(セックス)と社会的・文化的性差(ジェンダー)の区別を『第二の性』に読みこむ従来の解釈の問題性を指摘し、『第二の性』を現象学的見地からより革新的なものとして読んでいく作業を行った。これによってレヴィナスの性差の現象学のさらなる解明につなげることができた。

家族・親子関係については、初年次に『現代思想』11月号の「反出生主義」特集に寄稿し、2年目に京都で開催されたレヴィナスの国際学会で発表した。さらにこうした検討を踏まえたうえで、最終年度にレヴィナスによる親子関係の分析が現代の倫理学の文脈のなかで、いかなる倫理的意義をもちうるのかについて、家族倫理学や生殖倫理との比較のもとで考察し、甲南大学人間科学研究公開講座にて「親は子供にどの程度責任を負うのか ―親になることの現象学―」を発表した。

また性差の現象学と家族の現象学を結ぶ役割を果たす「人種」概念についても現象学的観点から検討を進め、現代の人種の現象学を代表するヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』を青土社から翻訳・出版すると共に、メルボルンで開催された国際メルロ＝ポンティサークルでメルロ＝ポンティの習慣概念から人種差別について考察する発表を行った。

以上の検討を経たうえで、レヴィナスにおける性差の現象学と家族の現象学の内的な結びつきを解明するとともに、レヴィナスの性差の現象学および家族の現象学の現代的な意義を示すという当初の目的はおおよそ計画通り達成された。また一部(とりわけ反出生主義との関連)に

については、当初の想定以上の成果をえることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 65
2. 論文標題 現象学とイデアリズム レヴィナスの現象学的倫理	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学誌	6. 最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 37
2. 論文標題 経験の記述は、なぜ批判的なのか？ フェミニスト現象学への諸批判に対する応答	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小手川正二郎	4. 巻 47(14)
2. 論文標題 反出生主義における現実の難しさからの逸れ 反出生主義の三つの症候	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 現象学とイデアリズム レヴィナスの現象学的倫理
3. 学会等名 都立大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 Shojiro Kotegawa
2. 発表標題 En decouvrant l'experience avec Levinas et Salanskis
3. 学会等名 Colloque international de l' IRePh "Les voies de l' universel : Jean-Michel Salanskis" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shojiro Kotegawa
2. 発表標題 Can Japanese Literature Contribute to the Contemporary Debate on Race?
3. 学会等名 Association for Asian Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 「フェミニズムの哲学」が可能だとしたら、それはどのようにしてか？
3. 学会等名 哲学若手研究者フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 経験の記述は、なぜ批判的なのか
3. 学会等名 日本現象学会シンポジウム「フェミニスト現象学は何をもたらさうか」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 What Can Phenomenology Do in Dystopia: Phenomenology of Responsibility for Refugees
3. 学会等名 Practical Phenomenology “Analyzing Darkness and Light: Dystopias and Beyond” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 Levinas contre l'anti-natalisme
3. 学会等名 Colloque international, Le singulier et l'universel (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小手川正二郎
2. 発表標題 Who is Responsible for Refugees in Japan?: From a Levinasian Perspective
3. 学会等名 International meeting "The past as a source of imagination and inspiration" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 荒畑 靖宏、吉川 孝 編著 小手川正二郎ほか著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 あらわれを哲学する	

1. 著者名 杉村靖彦・渡名喜 庸哲・長坂真澄 編著 小手川正二郎ほか著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍 レヴィナス哲学の新たな広がり	

1. 著者名 稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優 編著、小手川正二郎ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 フェミニスト現象学入門	

1. 著者名 小手川正二郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 トランスビュー	5. 総ページ数 278
3. 書名 現実を解きほぐすための哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------